

明治時代の思い出

松島 久之助

ルの小瓶一本、これはアツペタイザーとして、液はウキスキーダブル、これが私の限度でこれ以上は勧められても頂けません。私如き低血圧の者には寧ろ薬だとお医者さんより勧告されております。煙草は一日一〇本乃至一五本です。これは永い間の習慣ですのでさしたる障害はないと思います。

第四 には明日の事を思い煩うな私は性来精神の費で三〇才頃までは小心翼翼と取り越し苦労型で常に健康勝れず、為めに親友の一人が梅田雲浜でしたか名前は忘れましたが新新の志士の作詩……

井底痴狂過憂慮 天辺大月欠光明
即ち井戸の中の馬鹿な蛙は心配し過ぎ云々という詩を以て訓じて呉れたことが妙に頭にこだわりついていました時、偶々私は渡英することとなり、それ以来、滞倫一〇年、これを契機として気宇も開け、更に療育「明日のことを思い煩うな、明日はあす、みづから思い煩わん、一日の苦勞は一日にて是れり」また曰く「肉の欲の為に飽へすな」に深く感銘し、爾來暢快坊主となり、今日に及んでいる次第であります。以上四つの中で最後の点が長寿に最も関係ありと思うのであります。

私は明治四十年二十才の時神戸本店に入店しましたから約六十年前の覚束ない記憶の片々です。本造の二階洋館の下は砂糖部出納係、樽部受付等で約十四、五人居りました。北朝の洋室にはお家様一人の座われる畳一枚の席があり、二階の半分は店員の寝室で、奥の半分は重役文書係と外国係、経理等で七、八名位居られました。私は下の西川様の前の簿部で仕事する事になりました。其の当座店では金子、西川、上田(寛太郎)三氏の外は昔和服角帯前かけ姿でしたが段々洋服に変わって行きました。西川様の周囲は輸出品の買取りの商酌の番頭連や天産物の輸出品の売込みの商人連中其の他が書丹骨董品を購置、閑談に花を咲かすのんびりした風景も時々ありました。値段も七千四位の蜜が五羽箱程に留った一箱が三万五千円とか、二疋の鯉が泳いでいる二万位と、見たり耳にしたりの最中に、二人曳、三人曳で飛び廻ってビルブローカーが

英語でペラペラと報告を応対するのを面白い対照と思いました。入店当時は金つまりの不景氣時代に鈴木は、自當の火鼠製糖所を日權へ六百五十万円で売り渡した現金で二百五十万円七分利社債で四百万円受取って間もなき時分の事とて、特別賞金を懐に店員は朗朗愉快の雰囲気よき時代で、世間もその金を目当てにサトウに集る蟻にも似た千客万來西隣の三井銀行では支店長が時々お早う御座いますと出勤前寄って行かれました程で金の光が深く感じられました。

店に寝泊して居る若者の中で毎晩社員、見習員一人づつ交代で一丁精西に駆って居る本家へ官直することと、毎月朔日、十五日のお祭りに神私の酒のおみががぼんさんの仕事でした。お家様は小切手、契約書類等に署名捺印等で出勤され、仲々の御精勤でした。日替より受取る利札を私がお手伝いしてお家様と二人で全部切り取るのに一週間かかりました。次回は切り取る機械を購入する事にしました。その時お家様から色々聞いた中で、十七、八才の娘時代に大阪から大勢でお伊勢参りをし、道中鈴鹿を馬に乗って往復せられたと承りました。そんな事から翌年の正月に柳田様、西川様のお供で伊勢参宮に参り、古くから勅使の泊る麻屋がよいと考えて案内しましたが、只古い文だけで一向感心せぬ旅館で面目なしでした。

後藤長官が台所からのお帰りに本家に立寄られた節、沢山御馳せられ、身の廻りからすみすりの役を終りましたら私にも最後に一枚頂きました。家宝も今焼失してなくなりましたが

人間是世復休険、一路只存向上門
若登此心当萬事、精神一到射乾坤
と記憶して居ります。

店の年中行事は
一、元日、本家に年賀一同祝儀について一々御挨拶する事、祝儀を挙げてお年玉にくじ引で賞品を頂く事

一、お家様の誕生祝宴を旧八月十五日みるめの別荘で盛大に行われ、一同に正月同様くじ引で賞品を配与せられました。或る時私は上の部で白羽二重を頂いた

事がありました。

一、秋には播州福崎の山へ全員狩りに出掛ける事、ここは店の日野様の郷里で兄さんが村長さんであった関係で、一番よい山を村の有志大勢で山上牛肉のスキ焼の御食宴に世話して下され、手折った松茸は一同の土産やら東京支店や得意先へ配る秘沢山で、ここから直送しました。

一、春先には須磨の金子様の前庭で家族一同の運動会をする事
店迎の兼贈大展覧に連れ優秀なる人材が各方面から、又高附等の英才がどんどん入店して寄附金が必要になり、滝道の山腹のオリビアホテルを買収して立派な設備をしました。店の方も交換手を雇入れて電話室を作り、寝室を全部事務所に、下の方の物置を事務室に大改造しました。

この頃店の輸出部の別動隊として二十年も経験のあるポップさんを雇い入れ、日本商業会社を設立し、鈴木から香川様と私の二人が転任してカネ阪をはなれました。鈴木で扱ってない米銅と印度向けのメリヤス雑貨の輸出と、棉花洋反物鉄材等の輸入を致致しました。あとで輸入部は六三に移り、あとで二名が輸入の手

引を継ぎました。

その間神戸時代みるめ沖合で火災

を積んだ船が朝食の仕度の火が移って六時頃爆発した時、私達はオリビアでふとんの中でしたが一里以上距っているのに爆風でガラスは殆ど破れ破片がふとんの上、頭の上に降り込んで来て後掃除が大変でした。市中も各方面でガラス板、塀等の被害甚大で太平の夢一朝にして破れました。(臨浜別荘の被害も甚大でした)

又コソ泥が毎晩の様に市中を横行し、十回二十回と同じ手口の犯人を逮捕出来ず、非難ごうごうに答えて、私等も夜分八時過ぎオリビアに帰る道で度々取問を受け真犯人の出現を、今の三億円事件の様にさわいだものでしたがコソ泥はやっぱり捕えられませんでした。

段々と老若優秀の人材がどしどし入店する盛況で、私は大阪の砂糖部に転任しました。其の前年大阪の北区から朝出火し、強風の為め屋頂益々揺がるのを、神戸から見舞に来て福島で降ろされ、鎮火後神戸へ無事帰ったのは十時頃でした。

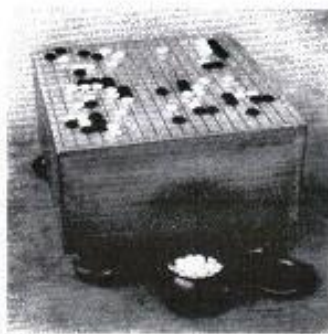
神戸時代金子様からお呼びとの事で二階へ行くと、私が四十年四月から十月まで勤務していた香港製粉会社の技師長の米田竜平様がそこに居られるのに驚きました。会社が倒産

して銀行からの売込中との事、米田様と私が事情を伝えましたところ、縁あって鈴木が之れを買取り、機械を大里に運んで大里製粉所として発足活動し、米田様も技師として勤務せらるる事になりました。

約五年の神戸の生活は書く事はいくらでもありますが、八十一年の

囲碁心情「ぞえわたる石の音」

京大教授東昇さんの話に依ると新好きは高段者に限らず、素人でもよい碁盤とそれにつり合ったよい碁石を手に入れたがる。盤の最高は日向のカヤの碁の六寸盤、石の最高は白石は日向の鈴、黒石は那智黒、厚み三分五厘、この厚みをこすと、石の



今日まで健康に幸福で過ごしました事は、神戸時代甲山、六甲山、摩耶山、再度山其他西の方明石の奥山へ幾十回と知れぬ登山で、知らず知らずの内に鍛えたお蔭です。歩く事は健康の一条件です。皆様におすすめて終りとします。

(四四・五・二五)

すわりが悪く打ったあとかすかにゆれる。符棋はさすと云い、碁はうつと云う。丸い石と四角の盤がつくりあげる世界のひとつは音の世界である。勝負手を放つとき、うちおろす石の音、それには殺気がみなぎる。あたりをはらってぞえわたる石の音、それだけで碁の強さがわかるといわれる。京都府下久世郡久御山町政田太一氏隆の盤は大徳寺塔頭の秀吉、家康対局の時絵盤と同時代作、石は甲斐の水晶づくり、江戸中期の作と推定されている。目に見えてはいかにも美しいがこの石とこの碁盤とで構成される石の音はいわずきびしい碁の世界、碁の世界が演出されるようか。